



「人が輝く元気で住みよい いばらき」づくりにむけて ～新年のごあいさつ～

茨城県知事
茨城県統計協会総裁

橋 本 昌

明けましておめでとうございます。

皆様には、すがすがしい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、景気の低迷、雇用環境の悪化、新型インフルエンザの流行など大変な一年でありました。本格的な人口減少と少子高齢化、厳しい経済情勢、危機的な財政状況など、県行政を取り巻く環境は大変厳しいものがございしますが、経済・雇用対策や聖域なき行財政改革に全力で取り組みながら、本年も「人が輝く元気で住みよいいばらき」づくりにまい進してまいります。

本年は、3月に茨城空港が開港しますとともに、圏央道や東関東水戸線の一部区間が新たに開通するなど、広域交通ネットワークの整備がさらに進んでまいります。私は、これら「産業大県」づくりから生まれる活力を生かして、「生活大県」の実現を目指してまいりたいと考えております。まず、医師確保対策に一層力を入れてまいりますとともに、ドクターヘリを導入するなど救急医療体制の整備を進めてまいります。また、乳幼児医療費助成制度の拡充による子育て支援や、高齢者の健康・生きがいづくり、障害者の自立支援に取り組んでまいりますとともに、地球温暖化対策や霞ヶ浦の水質浄化に力を入れるなど、「住みよいいばらき」づくりを推進してまいります。また、「いばらきづくり」の基本は「人づくり」にありますことから、少人数学級を小学校3・4年生まで拡大するなど、子どもたちの学力の向上や豊かな心の育成に力を入れてまいりますとともに、男女共同参画社会の実現に努めるなど、「人が輝くいばらき」づくりを推進してまいります。

さらに、茨城をさらに発展させていくためには、競争力ある産業を育て、雇用をしっかりと確保していくことが必要です。このため、広域交通ネットワークの整備と併せ中小企業の振興や企業誘致、最先端科学技術の拠点づくりなどに一層力を入れ、「元気ないばらき」づくりを推進してまいります。

現在、社会・経済を取り巻く環境に大きな変化がある中、このような施策を総合的に推進するためには、正確な現状認識と的確な将来予測が不可欠であり、その基礎資料となる統計の果たす役割は、ますます重要なものとなっております。本年は、世界農林業センサスが2月に実施されますほか、10月には、統計調査の基本となります国勢調査が予定されております。

皆様方には、統計の社会的意義と使命をご理解いただき、統計調査へのなお一層のご支援・ご協力を賜りますようお願いいたします。

皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、新年のあいさつといたします。本年もよろしく願いいたします。



【寅年生まれば24万1,600人 十二支別では8位】

新年の干支は「寅（とら）」です。そこで今回は、茨城県内の寅年生まれの人口を茨城県常住人口調査結果から推計してみました。

平成22年1月1日現在の寅年の年男・年女は、推計で241,600人（県の総人口に占める割合8.14%）となっています。男女別にみると、男性は120,400人、女性は121,200人で、女性の方が800人多くなっています。

寅年生まれの人口を出生年別にみると、昭和25年生まれ（平成22年中に60歳になる人）が50,700人で最も多く、次いで昭和49年生まれ（同36歳になる人）が44,900人、昭和37年生まれ（同48歳になる人）が35,100人となっています。（表1、図1）

表1 茨城県内の寅年生まれの人口（推計，平成22年1月1日現在）

生まれた年・年齢		男女計		男		女	
			割合		割合		割合
総数	—	241,600人	100.0%	120,400人	100.0%	121,200人	100.0%
1998年（H10）	12歳	28,800人	11.9%	14,800人	12.3%	14,000人	11.6%
1986年（S61）	24歳	29,300人	12.1%	15,400人	12.8%	13,900人	11.5%
1974年（S49）	36歳	44,900人	18.6%	23,500人	19.5%	21,400人	17.7%
1962年（S37）	48歳	35,100人	14.5%	17,900人	14.9%	17,200人	14.2%
1950年（S25）	60歳	50,700人	21.0%	25,400人	21.1%	25,300人	20.9%
1938年（S13）	72歳	31,900人	13.2%	15,800人	13.1%	16,100人	13.3%
1926年（T15/S元）	84歳	18,400人	7.6%	7,000人	5.8%	11,400人	9.4%
1914年（T3）	96歳	2,500人	1.0%	500人	0.4%	2,000人	1.7%

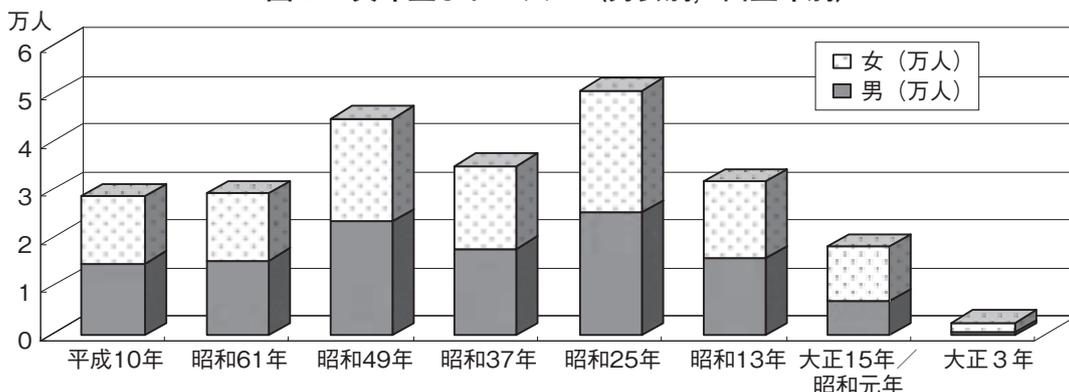
（注1）人口は100人単位に四捨五入してあるので、内訳の合計は必ずしも総数に一致しない。

（注2）年齢は平成22年中に誕生日を迎えた時の年齢。

（注3）1月1日現在の推計のため、平成22年生まれの寅年の人は含まれない。

（注4）常住人口調査では100歳以上の人口は1歳ごとに集計していないため、今回の推計では108歳の人数はカウントしていない。

図1 寅年生まれの人口（男女別，出生年別）



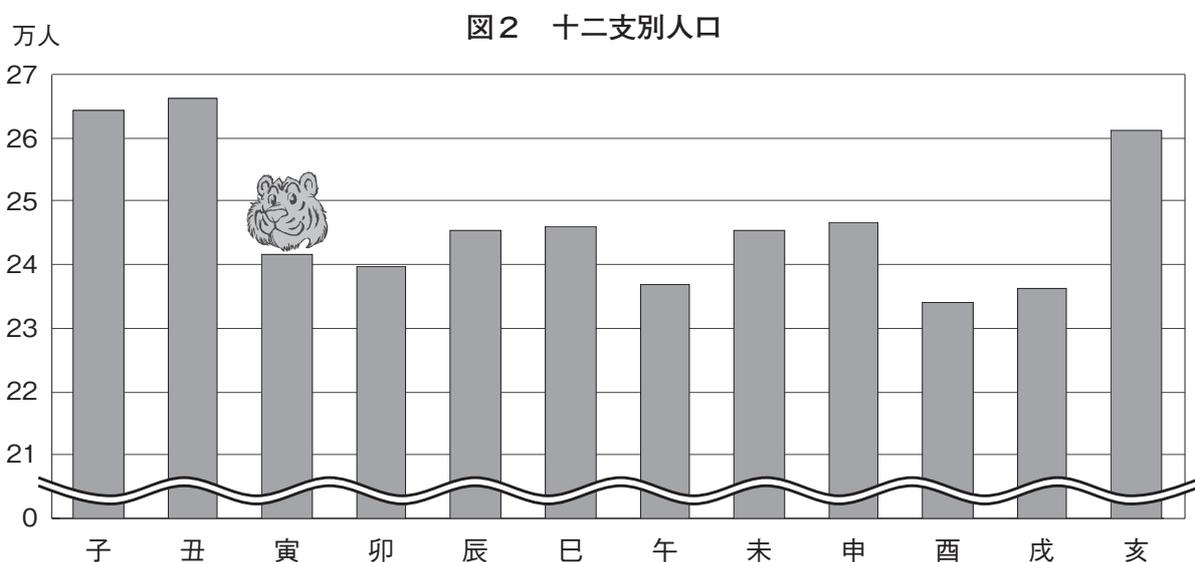
（注）茨城県常住人口調査結果から推計。平成22年1月1日現在。

また総人口を十二支別にみると、丑（うし）年生まれが266,300人で最も多く、次いで子（ね）年生まれ、亥（い）年生まれとなり、最も少ないのが酉（とり）年生まれとなっています。寅年は8番目です。（表2、図2）

表2 茨城県内十二支別人口（推計，平成22年1月1日現在）

十二支	人口	順位	総人口に占める割合
子（ね）	264,300人	2位	8.91%
丑（うし）	266,300人	1位	8.97%
寅（とら）	241,600人	8位	8.14%
卯（う）	239,600人	9位	8.08%
辰（たつ）	245,500人	6位	8.27%
巳（み）	246,100人	5位	8.29%
午（うま）	237,000人	10位	7.99%
未（ひつじ）	245,400人	7位	8.27%
申（さる）	246,800人	4位	8.32%
酉（とり）	234,200人	12位	7.89%
戌（いぬ）	236,400人	11位	7.97%
亥（い）	261,300人	3位	8.81%
100歳以上，不詳	2,700人	—	—
計	2,967,200人		100.00%

（注）人口は100人単位に四捨五入してあるので、内訳の合計は必ずしも総数に一致しない。



（注）茨城県常住人口調査結果から推計。平成22年1月1日現在。

－茨城県常住人口調査について－

茨城県常住人口調査は、国勢調査の間における県内各市町村ごとの人口及び世帯の移動状況を明らかにするために、県統計課が実施しているものです。国勢調査による人口及び世帯数を基礎とし、これに毎月、市町村から報告のあった出生・死亡・転入・転出者数及び世帯数の増減数を加えて推計しています。

干支（えと）別人口のカラクリ

茨城県企画部統計課 石井孝一

年末になると、茨城県統計課や総務省統計局などが、新年の干支（今回は「寅年」生まれ）の人口を推計して公表しています。

干支は、全部で12あります。

その中で、新年の干支の人口は何番目に多いのでしょうか。

茨城県統計課が平成21年12月25日に公表した「寅年」生まれの人口は、元日現在、24万1600人で、十二支中8位となっています。

では、「寅年」生まれの人口は毎年8位なのでしょうか。

来年の今頃、「卯年」生まれの推計人口が公表される頃、「卯年」生まれの人口は「9位」、「寅年」生まれの人口はきっと「1位」になっていることでしょう。

それはいったい、どういうことなのでしょうか。

転入や転出を考えなければ、人口の増減は生死の数によって決まります。

自分の干支の人口が増えるチャンスは、12年のうち1年間しかありません。

例えば「寅年」であれば、過去11年間、「寅年」はありませんでしたので、「寅年」生まれは誕生せず、死亡者数だけが増えていく、つまり、干支人口は毎年減り続けていくことになるのです。逆に、「寅年」が干支になる平成22年（2010年）は、その年に生まれた新生児が「寅年」人口に加わります。

当年の新生児は、決して他の干支生まれになることはありません。

（一部の芸能人や自己紹介の時などで、まれに発生することがあるようですが！）

これで、もうお分かりですね。

結論は、

** 理論上は、元日現在、新年の干支の人口は最も少なく、**
** 前年の干支人口が最も多い。 **

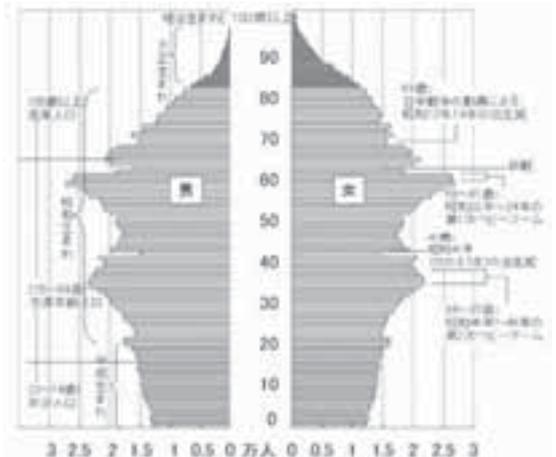
ということになります。

ちょっと待ってください。「1年後に「寅年」生まれ人口が1位になるらしいことは分かったけど、干支の前年は最下位の12位でなくて何で8位なの？」

こんな疑問がわいてきますね。

「理論上」は、人口ピラミッドが文字どおりピラミッド型又はきれいな富士山型をしている国ほど強く当てはまります。

茨城県の人口ピラミッド(平成21年1月1日現在)



資料：茨城県統計課「茨城県の年齢別人口」から作成

しかし、日本では、第二次世界大戦、ベビーブーム、第二次ベビーブーム、丙午（ひのえうま）、少子化などが影響して、必ずしも理論どおりの干支人口とはなっていないのです。

茨城県の人口ピラミッドをみると、昭和19～21年の終戦前後による出生減で「申（さる）」、「酉（とり）」、「戌（いぬ）」年生まれが、昭和41年「ひのえうま」の出生減で「午（うま）」年生まれが影響を受け、それぞれ干支別人口で12位、11位、10位となっています。

一方、昭和22～24年の第一次ベビーブームによる出生増で「亥（い）」、「子（ね）」、「丑（うし）」年生まれが、昭和46～49年の第二次ベビーブームによる出生増で「亥」、「子」、「丑」、「寅」年生まれがそれぞれ影響を受け、「理論上」よりも、人口が多めになります。

茨城県の人口重心の推移～国勢調査の結果から～

平成22年10月1日に、5年に一度の国勢調査が行われます。国勢調査は、大正9年（1920年）から現在まで続いている最も重要な統計調査で、今回で19回目に当たります。

国勢調査の結果から得られたデータは、少子高齢化対策、都市計画、防災計画、過疎対策など、国や地域の様々な政策の基礎資料として広く活用されています。今回は、国勢調査結果から算出された茨城県の人口重心について紹介します。

まず、人口重心とは、人口の1人1人が同じ重さを持つと仮定して、その地域内の人口が、全体として平衡を保つことのできる点（重心）をいいます。

人口重心によって、その地域の人口の分布や移動の状況を示すことができます。

また、重心の位置を時系列的に表示することによって、人口分布の推移を把握することができます。

図1及び表1をみると、大正9年から昭和10年までは、重心の位置は石岡市（旧八郷町）東成井（ひがしなるい）あたりでほとんど変化がありませんが、昭和10年から15年にかけて北東に向けて重心が移動します。これは日立市を中心とした軍需工場の拡大等によって、労働力人口が県北地域に流入したためです。

昭和22年の臨時国勢調査では、戦争によって工業地域が破壊されたため、県北地域の人口が減少し、人口重心は昭和10年当時とほぼ同じ位置に戻ります。

昭和25年から昭和40年にかけて、高度経済成長等により日立市・ひたちなか市（旧勝田市）を中心とした県北地域の工業地域に人口が流入し、再び北東に人口重心が移動します。昭和30年には日立市の人口は水戸市を抜いて県内1位になり、昭和51年10月1日現在まで県内で最も人口が多い市でした。

昭和45年以降は、一転して人口重心は南南西の方角に向けて移動します。鹿島開発、筑波研究学園都市の建設、県南地域の首都圏のベッドタウン化等により、県南地域に人口が流入したためです。

上の写真は、平成17年の人口重心位置で撮影したものです。茨城県の人口重心位置は、東経140度13分44秒、北緯36度13分16秒で、石岡市正上内（しょうじょううち）あたりです。背景に見えるのは、（仮称）石岡・小美玉スマートICの工事箇所です。

茨城県常住人口調査によると、平成17年国勢調査以後も、つくばエクスプレスの開通等により県南地域の人口は増加しており、平成22年の国勢調査結果では、さらに南に人口重心が移動することが予想されます。

人口は、社会を構成する最も基礎的な要素であり、人口の変化は社会情勢の変化と密接に関係しています。人口重心の推移は、茨城県が歩んできた歴史であるともいえるでしょう。



平成17年国勢調査 茨城県人口重心地点
石岡市正上内 地内（平成22年1月吉日撮影）



「平成22年国勢調査」にご協力をお願いします！

～調査期日は10月1日（金）です～

